

# 気質物の変容に関する一考察

- 『世間娘容気』から『世間妾形気』へ -

高永爛\*

---

## 目次

---

1. はじめに
  2. 『娘容気』の主人公の類型
    - 2.1. 分限者の娘
    - 2.2. 武士の娘
    - 2.3. 多様な娘の「気質」と「個性」
  3. 『妾形気』の主人公の類型
    - 3.1. 妾とお金
    - 3.2. 素人女性とお金
    - 3.3. 女性と欲
  4. 最後に
- 

## 1. はじめに

『世間妾形気』（以下、妾形気）<sup>1)</sup>は上田秋成（以下、秋成）の気質物第二作である。2)その序文で「さてもさても八文字が糟粕」と明示しているように本作は八文字屋本を踏襲して執筆した気質物であることには間違いなく、3)作品名に注目してみると妾の「気

---

\* 高麗大学非常勤講師、日本文学

- 1) 1767年刊行（序文は1766年に書かれたと知られている。）各巻には独立した三章が展開され四巻構成で総十二章である。ただし、一卷の二・三章と三巻の二・三章は連続する話であり、総10話が展開されると考えられる。
- 2) 秋成初の気質物は『諸道聴耳世間猿』（1766）であり、『妾形気』は二番目の気質物である。この点は、佐伯孝宏『江島其磧と気質物』（若草書房、2004）282頁、長島弘明『秋成研究』（東京大学出版会、2000）91頁等、諸研究書で言及されている。

質」4)が描かれていると推定できる。実際『妾形気』の主人公である女性皆が妾なのではなく、素人女性、遊女などその社会的位相や職業は様々であり、秋成は実際の身分とは関係なくお金に執着する女性一般を「妾」として捉えている点否めない。

この『妾形気』に関して森山重雄は井原西鶴の『懐硯』(1687)、『日本永代蔵』(1688)、『西鶴織留』(1694)等の文章と素材を利用・踏襲した作品であるとされる。5)これらの作品は西鶴の浮世草子の中でも人間の歪んだ一側面を描いたものである点は周知の通りで、前に挙げた西鶴の作品を用いて『妾形気』の「気質」が描写されたとすると、『妾形気』はやはり気質物の流れを汲む作品であると言える。ただし、森山氏は気質物の流れの上で西鶴より始まる人間への関心は其磧に至り「気質」という明確な類型を示し、秋成へと受け継がれる間、その本質は変容されたと言及される。6)

一方、主として女性の気質を描いている作品としては気質物の嚆矢江島其磧(以下、其磧)作『世間娘容気』(1717、以下『娘容気』)が有名である。これは『妾形気』より50年前に執筆されてたもので、『妾形気』と同様、女性達の一風変わった言動・性格等の描写をその主な内容としている。『妾形気』の序文を鑑みるに『娘容気』は『妾形気』に何等かの影響を与えたに違いないが、先行研究では二作の執筆期の隔たりのためであろうか、森田喜郎の研究7)以外には具体的な比較分析を充分に行っていない

3) 森山重雄は「秋成の浮世草子-気質物から諸道聴耳世間猿と世間妾形気-」〈国文学解釈と鑑賞〉23巻6号(至文堂、1958.6.)で、「(秋成)は『妾形気』の序に荒唐世説とあるように彼は浮浪者-人間の価値の基準をとくにもたない点で、庶民の生活を抽象するすべを知らない反面、庶民的生活者に共感しつつこれを容体化するという有利さとして気質を描いた。すなわち町人的人間タイプは崩壊しつつあり、むしろかえって過ぎたり偏したりする人間象こそ、気質というものの実態だったと言えるのである。」と述べられている。また、同じ論文で「『世間猿』には悲観意識、『妾気質』には楽観意識を反映し、やがて前者が『雨月物語』の世界へ展開して行く。秋成の描く詐欺説話は細民化した庶民の罪のない生活術であり(後略)。」と評している。これを通じて、『妾形気』は江島其磧作気質物と同様、類型人物の特殊性を素材にした作品であると言えよう。

4) 気質物とは江島其磧に始まる浮世草子の下位ジャンルで、一般に「気質」とは類型特殊の趣味、性格という意味で用いられる語彙である。しかし、佐伯孝弘は前掲書の21頁で気質物の中の「気質」とは本来の意味と掛け離れて「極端に常識はずれの性癖」だと示している。つまり、社会一般から期待される理想的な類型性でない非常識的な特殊性を指すという言葉であるが、ここで「常識、理想的」という語彙は甚だ主観的に捉えられる可能性が高いので、本稿では佐伯氏の意見に同意しつつ、「気質」を「人物の属する類型から観察できる儒教的規範にそぐわない傾向」と定義する。

5) 森山重雄『上田秋成初期浮世草子評釈』(国書刊行会、1997) 評釈参照。

6) 前掲論文、「秋成の浮世草子-気質物から諸道聴耳世間猿と世間妾形気-」 「この物に執する人間の姿は西鶴にあってはエモーショナルなげしきで、生の根源的な実体を表出している。ところが其磧にあっては、これがたんなる趣味的な逸脱、町人世界への反語でしかなかったのである。(中略) 秋成がうけついだものも、この風骨(かたぎ)の崩壊にほかならない。」

7) 森田喜郎は「気質物としての『諸道聴耳世間猿』『世間妾形気』の意義について」〈文学研究〉第45号(日本文学研究会、1977.6.)、「上田秋成の描いた女性」〈文学研究〉第75号(日本文学研究会、1992.6.)の中で「婿選び」という同素材を扱った『娘容気』の五の一と『妾形気』の一の二を比較し、『妾形気』ではより現実的な人物描写が行われている旨指摘されている。

い。また、『妾形気』に登場する一部の人物に関する考察は行われているが、8)『娘容気』および『妾形気』の全人物象に関する包括的な考察は今だ行われていないのが現状である。ここに『娘容気』、『妾形気』両作は数少ない江戸期の気質物の中でも主として「女性」の言説・行動に焦点をえ当てた特殊な作品として注目に値し、同素材を扱った同ジャンルの作品という側面からも比較研究する必要があると考えられる。一步踏み込んで、主人公達の性格や特殊性の主な傾向に関する研究、つまり主人公の類型性や特殊性に関わる研究は今だなされておらず、この点究明されてこそ両作品各々の統一された主題が理解でき、両作品の差異を確かめられると考えられるのである。したがって、本稿では『娘容気』と『妾形気』それぞれに描かれる女性像の実体を分析して、これらを比較考察してみたい。これは浮世草子に描かれる女性象を通して江戸の女性像を把握するという側面でも意義ある作業だと言えよう。

## 2. 『娘容気』の主人公の類型

### 2.1. 分限者の娘

『娘容気』の序文では昨今の女性の違いが強調され、殊に今の女性は浮気で華やかである反面つましくない点が嘆かれている。9)つまり、当時の女性は慎ましく儉約で男性に尽す女性の理想像とは掛け離れている点、序文から確認出来るのである。一方、総一六章10)の『娘容気』の主人公の女性達はその出自や成長環境、前歴等がまちまちであり、これら多様な社会・身分上の類型は多くの場合文中に明確に示されている。

まず、その数が最も多いのは「分限者の娘で大事に育てられた」と言う設定であるが、その二三を確認してみたい。

8) 前掲書『秋成研究』75-90頁によると、『妾形気』は実存する人物や巻の噂を利用した作品である点を明らかにする。また、石山美穂「上田秋成の浮世草子-『世間妾形気』巻之三第七をめぐって-」〈白門国文〉第10号(中央大学国文学会、1993.3.)によると、『妾形気』の三卷七章に登場する藤野の性格に関する具体的な研究が行われ、佐伯孝弘「お春の造形-『世間妾形気』の一の二・一の三小考-」『近世文学論輯』(森川昭編)(和泉書院、1993)によると、『妾形気』の一の二・三章に登場するお春に関する具体的な研究は行われているが、これ以外の人物に関しては今だ研究が進められていない。一方、伊藤竜平は「上田秋成の比喩-散文作品を中心に-」〈国学院大学大学院紀要-文学研究科-〉第30輯(国学院大学大学院、1999.3.)で、『世間猿』、『妾形気』、『雨月物語』の比喩表現を通じて、『妾気質』の人物の内面描写が行われた場合、それは天性を描くものが多いとされる。

9) 中嶋隆訳注「世間娘容気」『世間子息気質 世間娘容気』(社会思想社、1990) 330頁。以下、テキストとする。「すべて女の道といふは、かならずしも才智人に勝れたるをいふにあらず。貞節の心を専にして、淫乱なる心を退、世帯がたに心を籠て夫によくつかへるをいへり。(中略) 今おしへずしてよく知れるは好色の道ぞかし。」

10) 一巻から四巻まで各巻三章、五、六巻は各巻二章で構成されている。

爰（ここ）に室町の呉服屋の秘蔵子、きりやうすぐれて見る物（マ）、魂をうなひ、諸方からいひ入る中に、（一の一、332頁、以下傍線は引用者による）

是身上善悪の堺町に材木屋の木工兵衛とて有徳なる町人、今世盛の棟高く、内儀は立売りの呉服所の惣領娘、身代半分入てのこしらへ、時代蒔絵の手道具に、小袖は手の物とて工手間のかかりし素縫・織紋・地なしの鹿子の美をつくして仕付けられる。（二の二、353頁）

「親達に此世の名残に顔見せに、ちょっとかへりました」と泣出せば、両親心もとながりて、「いかなる事ぞ。娘の子とてはそちひとり。いづくの浦にゐても息災なといふ便りをきけば満足じやに。心にかかるいひぶん、様子をいへ」（中略）（中略）心次第に毎日何方へも遊山に出よ」と、家久しき年寄の手代を付置、（四の三、391-394頁）

上で確認した人物の類型に注目する理由は、この類型人物が見せる一風変わった性格・言動、実に「気質」と呼べるものはほかでもない、「分限者の娘で大事に育てられた」という事実に還元されるからである。ここで、彼女達の具体的「気質」を見てみよう。

嫁御はむくむくと起きあがりて、「乳母モウいなふ」とあるを、「お道理お道理。お乳あがっておよませ」と、おさなひ子をするごとくひぎの上にかきよせ、乳房出せば、十七になる娘御大ぶり袖を着ながら、乳母が乳くはへてずいずいとすはるすこそけうとけれ。（一の一、333頁）

「こちのわるもさふした事かしらず」と、内儀の道具に詮議しかかり、箆笥共吟味せらるるに紙が一枚入てなし。「是ただ事にあらず」と、油小路（あぶらのこうじ）の妹が方も穿鑿あるに、いづ方も着のままにて夏冬の物一つもなかりき。（中略）「近年御親類の女中づきあひ夥き奢りにて、替りめの狂言に六間つづきの棧敷あけさせ、役者子共への付届け、仕出し茶屋のしはらひ、万事の物入かふあるはづ」と申程に、一門の亭主共手を打て肝をつぶし、（二の二、356頁）

女の悪性さまさまなる中に、ゆづらぬ家を書入しての金の才覚。世間にむす子の性わるが死一倍をかるといふはなしはきいたが、女の身としてかかる行跡、（中略）衣装をはいで、一重紙子に着替さへ勘当帳に迄つけて、旧離切て追出しければ、此身になりても恋をやめず、それからつき出しの白人となって、其役者と一座することをよろこび、（四の三、395・396頁）

このように「分限者の娘で大事に育てられた」女性は成人しても今だ赤子のままだいるほ

どであり、結婚をしても儉約できずお金を使い果たす始末であり、お金と男に陥り奔放に暮らし結局悲惨な最後を飾る始末である。つまり、彼女達の「気質」は個人的な性格に原因を求めるには文中に何も明確にされておらず、「分限者の娘で大事に育てられた」ため見受けられるものと言えるのである。

上で確認した人物以外にも二の三、三の一、三の三の女性も「分限者の娘で大事に育てられた」女性の類型に入ると言えるが、<sup>11)</sup>彼女達の「気質」は各々の社会・身分上の背景下で構築されたとは言い難い面がある。その具体的「気質」は以下の文中から明らかになる。

此娘きはめて哀なる事が好にて、ちいさい時から日ぐらし太夫が歌説経をきいて、またなくあはれかり、(中略)母親の異見、其身も尤もとは思ひながら、半日にても涙をこぼさねば、食がすすまず、(二の三、358頁)

天性(うまれつい)で恪気ふかく、乳母をはじめ物ぬひ・腰元・中る・下女に至る迄、色つくるを腹たて、(三の一、364頁)

姉娘はかくと聞より涙両袖をひたし、つまにをくるも世のならひとはいひながら、是程はかなきうきめにあふは、前世の因果なるべし。たとひ一夜もそはぬとて、夫婦のけいやくするからは、女をたつるはづはなし。姿をかへて過さりし夫のための後世ぼたいの道に入べし。(三の三、374・375頁)

妹のおなつは、本町の呉服やへ縁につきしが、下々と密通あらはれ、(中略)すこしも是を恥たる粧ひもなく、若い手代をとらへてはじゃらじゃらとのてんがう口。(中略)歯がみをなせども性悪の娘のしごこなひ、今さらとりかへしがならず。(三の三、376-378頁)

これら「分限者の娘で大事に育てられた」女性の類型が有するそれぞれの「気質」、つまり哀しい事が好きな趣味、嫉妬深い性格、貞節を守り通す性格、男にだらしない性格は彼女たちの社会・身分上の背景と大きく関連しているとは言い難い。むしろ、彼女達の生れ持った趣味や性格から構築された「気質」は同様の環境で育った他人からは、つまり類型からは見受け難い己れ個人の性格という側面で「個性」と言えるのである。

11) 近年商物に利のまはりのよい木薬屋(=生薬屋)道齋とて、五十に及んで始而女子をまふけ、大かたならぬ重宝、名さへおいと付て、夫婦のいつくしみ、(三の一、364頁)

爰に長堀のながれの末に、木曾山の材木屋せし有徳人の息女、美形当流の釣嶋田、針がね入のヒ(はね)影+会(もとゆひ)かしらから常の仕出しに替り、光琳もやうに手をこめ、(二の三、357頁)

所がら武蔵野の広さ心の商人、少望姓の時より大きな受取普請にかかつて、年々大分まふけて、今世盛の金の光り、軒にかがやく星月夜、鎌倉河岸(原文：木+可、木+戈)の材木屋の木曾右衛門とて、かくれもなき新長者。十六と十五になる兄弟の娘を持しに、二人とも都にも稀れなる器量。(三の三、374頁)

したがって、「分限者の娘で大事に育てられた」女性の類型はその社会・身分上の背景の下作られる「気質」を有する場合と自己特有の「個性」を有する場合に分けられると見受けられる。これは『娘容気』が執筆された時代に同様の社会・身分を背景にする女性であっても、場合によっては己れの属する社会・身分を越え、「個性」を露にすることが観察される事を示すのである。

## 2.2. 武士の娘

前で確認した女性の「気質」と「個性」は『娘容気』の他の類型でも見受けられる。まず、武士の身分である女性の類型を見てみよう。

爰に呉服町の巻物屋の半四郎とて、有徳人のむす子、店商は手代にまかせて毎日の遊山。けふも桜の盛に愛、樽の前によいきげんして帰らん事をわすれ、(中略) 母おやも歴々の侍の息女なるが、むかしをすてて朝夕の米をかしぎ、 (中略) ましてこなたの女房に『討はたさふ』といひかけられ、『かんにんせい』とは男に似合ぬ卑怯の至り、尋常に勝負あれ。 (二の一、346-348頁)

上の女性は「歴々の侍の息女」であるが、訳あって町人の妻になる。しかし、彼女は「それより亭主は女房に強みつきて陸言も鬼とざれごとというやうで打とけててんがうもいはざれず。」<sup>12)</sup> というぐらい武士の娘らしきを見せ付ける人物であり、したがって彼女は自らの出自の影響下にあり、武士の娘としての「気質」を有すると言える。この女性と同様、武士の娘をもう一人見てみよう。

生国播州に武家奉公をつとめし伝七といふ男、(中略) 播州の古主につかへし傍輩の侍二三人、伝七方へ尋寄「主人のむすめごととわどの、同じ家中の歴々へ縁につかれしが、出入りの玉都(たまいち)といふ声のよい座頭と、度々の不義あらはれ、すでに手討にもせられるべき所なりしが、」(中略)「夫と見かへてかふした我なれば、此所にはもはやるられぬしゆびなれば、いづ方へもつれてのき給へ。さもなくば長持あけて亭主にねだらすが」といやおふのならぬいひかた。むす子ものりかかった女房なれば、ぜひにおよばず (六の一、411-413頁)

このおとわたる娘は許嫁がいるにも関わらず、男を替えて逃げ回る上、新たに一緒になった男を脅迫しつつ最後は前の男を長持ちに閉じ込め、「『播州の某の娘とわ』と書付、長持にはって心しづかに立さりぬ。」<sup>13)</sup>と描かれるように驚くほど強かな「個性」を見せ付

12) テキスト349頁。

13) テキスト413頁。

けるのである。おとわを前で確認した武士の娘と比較すると、おとわは己れの社会・身分上の背景を越えた強烈な「個性」の持ち主だと言える。

おとわ以外にも己れの属した社会・身分上の背景を越え「個性」を有する人物としては五の二に登場する妹が挙げられる。

過ゆかれし夫の事を思ひ出して、露に泪に両袖の湊、難波橋筋に、福岡屋の五右衛門後家とて、ふつつかなる生れつきなれ共、心正路にして人にくまれず。(中略) そちが十七、嫁も十七なれど、世間の思ひやりありて、あのごとく身をすてて内証を隠し、親里へも是をしらせず、かかる前後を凌がるは、女の鑑にも末々迄しらすべきいとをしき人なり。(中略) 娘ははきたる席馱を親になげつけ、不断のね間にゆくを、(中略) 誰がをしへねどいたづらの道を知て、二度のやふいりにも親元へは帰らず、(中略) 身をぞんざいに持ちなし、女ながら針持すべきへしらず。(五の二、404-407頁)

上記の妹は同じ年の嫁に比べて、町人の娘としては甚だしく悪態をつく人物である。彼女の性格は町人の娘という社会・身分上の背景を全く関係のない「個性」といふしかないのである。

以上のように、『娘容気』には主人公が属した社会・身分上の背景からは期待できない「個性」を持つ者が、社会・身分上の背景から期待できる「気質」を持つ者と比較されつつ登場するのである。もちろん、ここで述べている「個性」とは一般的に周りの人が困るものであるが、この「個性」が見受けられる現実が『娘容気』では暗に描かれているのである。

### 2.3. 多様な娘の「気質」と「個性」

『娘容気』では前で確認した人物以外にも己れの属した社会・身分上の下構築される「気質」を有するしかなく、その運命に翻弄される人物もきちんと描かれている。一の二、一の三、三の二、四の一、五の一に登場する女性がこれに当る。

小鼓打松林音右衛門を召出され、(中略) 兄に増って天性拍子よく鼓をすきて、親の打つほどの事をならはずしてよくおぼへ、乱道成寺の伝授事迄聞覚へて、(中略) あのやうなぶ器用なむすめの子はひろひ世界に又有まじと産出した母が目にあまれば、(四の一、380・381頁)

かんじんの姫君の出られぬをふしんすれば、一昨日より大熱にて今に枕あがらぬよし。「是は」と自身懇なる医者の方へはしりゆき同道して見するに、「疱瘡の山をあげてしかも大ぶんの出もの。ずいぶん大事にかけられよ」と薬をおいてかへられぬ。(中略) えぐ瘡と

やらんにて一面に跡つき、むかしの美なる容はなくて、面体黒菊石引つり、ひとへに炭火で手水をつかひしごとく、広きむさし野に又なき悪女。（四の一、382・383頁）

四の一の妹は太鼓打ちの娘で太鼓打ちの能力があるにも関わらず、父は妹を嫁に行かせ、息子は羽織屋に弟子に行かせる。女であるという身分は彼女の「個性」を発揮することを妨げ、女として生きていく運命に追い詰める。また、一の二の女性の性格もその背景に彼女の出自の秘密が存在し、彼女も自らの属した社会・身分の下構築される「気質」を有すると考えられる。これを以下で確認してみよう。

爰に町人ながら能主とよばれて、其名都に立売の有徳仁、代々家職もなく名物の道具つたへて、雪に茶の湯、花に歌学、朝夕世の事業しらず。亭主は万事大名気にて台所を見ず、（中略）内儀はやごとなき御方の落し子にてならびなき美人。歌道は其家の流れに心ふかく、しかも音曲の業妙にして簫（しょう）の名人。六月に冬の調子をふきて霜をふらし、寿命の調子をふいては夫の鼻毛をのばさせ、芸といひ気分といひ万を花車でかためし身。（一の二、335・336頁）

上の女性も身分が高いという出自のため、町人の妻としては備えがたい芸を身に付けているのである。この人物と同様、一の三、三の二、五の二の女性<sup>14)</sup>もそれぞれが属した社会・身分の下、「気質」を有するようになる。<sup>15)</sup>

以上、『娘容気』の主人公である女性像を具体的に見てきたが、その特徴としては次の点が挙げられる。一つ、主人公である女性は己れの属する社会・身分上の背景の下、一人の成人女性としては似合わない類型的「気質」を見せる。二つ、主人公である女性は親の属した、または己れが以前属した社会・身分上の背景の下、現に自分が属している町人社会・身分には似つかわしくない姿で描かれる。三つ、主人公である女性は己れの属する社会・身分上の背景の下、「個性」を発揮できず類型的「気質」を有することになる。四つ、主人公である女性は己れの属する社会・身分を越えた「個性」を有する場合がある。

14) 此もの妻は御所方のお歴々のすへにめしつかはれて、歌書の御文庫あづかりし四人の中の其ひとりの女なれば、今町人のせはしき世に住みながら、ありむかしの玉づから色つくれる面影常にかはり、（一の三、340頁）なぐさみもの身としてとかく仏沙汰いふて、一座の興をさますわるひ癖があって、（中略）此娘もと養子にて実の親のせんざくすれば、ことばりなるかな、去お寺の大黒のうみすてし娘とかや。誠に念は生をひくといへり。（三の二、372・373頁）（夫が死に）おゆきは当座に自害をもする程のかなしみ。（中略）されば世の中に借錢負も嫁入するも同じ事にて、外聞わるひの恥かしひのといふはずんと前方のせんざく。度かさなれば面の皮あつうなつて、近所のおもはく世の人口いかないかな耳にかからず。（五の一、399-401頁）

15) ただし、『娘容気』の四の二では女性の姿が描かれているのではなく例外的に事件が描かれ、また、六の二では通常浮世草子の最後が喜ばしい話で結ばれるように貞節を守り抜いた女性の話が設定され、人物の姿が描かれていないと判断される。



このような『娘容気』の主人公である女性像を通して『娘容気』が執筆された時代には女性の社会・身分と密接な類型的「気質」が見受けられると共に、社会・身分上の背景を越えた「個性」を有する女性も観察されたと言える。そして、身分の高い女性が町人として生きていく、いわば位落ちの生々しさも見受けられた。これらを総合して見ると、『娘容気』には江戸中期の女性が社会・身分に捕われ翻弄されつつもそれを越えてみようと試みた一側面を垣間見たと言える。この点こそが『娘容気』の全女性像から窺える大きな主題であると言えよう。

### 3. 『妾形気』の主人公の類型

#### 3.1. 妾とお金

次に『妾形気』の女性像について確認したい。『妾形気』は各巻三章の四巻構成で総十二章であるが、一の二・三、三の二・三が続き物なので全部で十の話が展開される。したがって、本稿では十人の女性について検討してみたい。

『妾形気』の主人公の女性は妾、素人女性、遊女とその身分は三つに分かれる。一の一、二の一、二の二、三の一には妾、一の二・三、二の三、四の二、四の三には素人女性、三の二・三、四の一には遊女が登場する。まず、妾である一の一に登場する女性の姿から見てみる。

中将殿の妾花園と奉公者半平は偶然良い仲になる。16)半平が花園に駆け落ちをねだると、花園は次のように語る。

それハといへば何事も本銭のしがくなくては手すさみありとて又つまらず。其工面さへ出来たら、鬼住里へもゆく心。(一の一、192頁)

上のように花園のお金に対する執着は愛に対するものより強いのであるが、しかし、このお金に対する執着さえも絶対的ではないのである。これを以下で確認しよう。

心おとすな、世の中に無禄の人ハないとやら、それもそうよと明あき（マ）らめて、女夫茶めい

16) 前掲書、「世間妾気質」『上田秋成初期浮世草子評釈』一の一、189-191頁。以下、テキストとする。白河に桜戸の中將殿とかや申て、やんごとなき方のおはしける。(中略)あまたなれむつれさせらるる中に、花園といへる新命、年ハ二十に一ツ二ツ、黠(ひす)からぬ才発ものの、白くあぶらつきたるにとんと打込んで、(中略)色香まさりて憎からぬけハハに、半平心ときめきて、人も性根なけれバ、胸だくして、是ハ花園様、(中略)やにはにひたと抱付バ、これあの人は酒が過てかめつそうと、

しやうぎ  
屋店の竹床几、(一の一、195頁)

引用文は半平が駆け落ちの際準備したとした資金は存在しなかったことが明らかになった場面であるが、花園は上記のようにいとも簡単にお金を諦めてしまうのである。つまり、花園の姿はお金に執着はしたが、その執着は境遇によってはすぐ捨てられるという事を意味するのである。この花園について森山重雄は「花園の方には、成り行きのまま生きて行く庶民性の強さがある」<sup>17)</sup>と述べられている。

次に、もう一つ妾の登場する二の一を見てみよう。二の一では妾を斡旋する婆が雛祭りを祝うために知り合いの妾幾人かを集めてなすのであるが、妾達の愚痴話を聞き、これを戒める。

さっきからの話ハ、打とけてのうさばらしとはいひながら、あまり成るかげ口。人も聞ぞかし。(中略) 茶や者ハ多くの客にあふを全盛として、妾者ハ一人の男にまもらるをおのがさかへとする物ぞ。只かかさんの為に恥かしい奉公を致します。お心替らずお見捨なうよりハせりふ有まじき物を、さまさまのはでな詞づかひ。はすハな物ずきより、かへつて茶や者の第二におちて、地女のまこと仕出しハどこへゆき、終に人のさげずミにあふ事ぞ。(二の一、224・225頁)

上の婆の話によると、妾とは一人の男に誠実につくすべき者であるが、次の引用文により、妾の現実とは理想と程遠いものがあると見受けられる。

手前おれん様のやうな、うまい身ぶんと申てハ、広い大坂にもたんとござりますまい。不断ちりめん羽二重を五ツ六ツづつ引かさねて、ちょっとどれへござるにも、手竹輿(かご)にめして黒土ふまず。芝居はいつも初日棧敷を西三四軒に極め、(中略) 此女房男の長わづらひより忍びのつとめ、一月定めて錢一貫文の内を、口入に四百の口錢。(二の一、226-229頁)

引用文の前半に登場するおれんは婆が妾奉公を斡旋した人物で、お金に困らない裕福な生活をしている。反面後半に登場する女性は夫の病気のため、わずかなお金を稼ごうと妾になったのである。ここで、女性が妾になったその背景に「お金」が大きく関わってくるのが分かる。この点を裏付けるように「お金」の為に騙る妾繁野の姿を見てみよう。

繁野涙をはらはらと流し、誠にかやうな恥かしき宮仕へをしますも、深きわけありての

17) テキストの評釈196頁。

事。(中略)あなた様のやう成る誠のお侍様を見受ませぬ。哀れ不便とも思しめさば、我々親子が力ともなりて、一太刀恨みさして給ハれと、(中略)顔みぬさは憎い憎いと思ふて居たれど、此間からなじみかさねまして、情らしい殿御ぶりに、恥かしながら惚ました。もはや敵うつ気ハござんせぬ。かへり討にして下さんせと、帯解て抱付しもおかし。(三の一、254-257頁)

繁野は妾として相手の気に入るために繰り返し騙りを働くのであるが、彼女のこうした性格の背景にも妾として働き続けたい欲求、つまり「お金」が大きく関連してくるのである。<sup>18)</sup>

以上、『妾形気』の妾の言動や性格は多く「お金」と関連し、彼女達の類型的姿は「お金に執着する気質」として描かれていた。しかし、一の一に登場する花園の性格からも分かるように、妾が「お金」に執着する理由は絶対的なものでもなく個性でもほかでもない、「女」だからではなからうか。妾個々が己れの「個性」のために「お金」そのものに執着しているというよりは、「男」に比べて稼げる手立が少ない女性の一側面を類型的に捉えた結果、妾の「お金に執着する気質」が描かれたと言えるのである。つまり、『娘容気』で「気質」を有する人物の中、己れの社会・身分上の背景を越えることができなかった類型がそうであったように、『妾気質』でも「女」という社会・身分上の背景を越えることができなかった類型の一つとして「妾」が設定され、「お金に執着する気質」が描かれたと考えられるのである。では、素人女性の場合どのような姿で描かれているのか次の章で見てみたい。

### 3.2.素人女性とお金

『妾形気』には妾以外にも素人女性が登場する。最初に登場する一の二・三のお春は浦嶋太郎の血筋だという設定で、老いもしない非現実的な人物なので、後に考察することにする。次に素人女性として最も早く登場するのは二の三のお糸であるが、彼女の姿は以下のようなものである。

あれが後家かと見るたびに、咽かはかさぬハなかりけり。しかも心だておとなしきやら、朝夕の仏壇に、過ゆかれし人の菩提を念比に吊ひて、すきさへあれバそろそろと、知恩院、誓願寺にあゆミを運び、水晶の念珠につたふ涙の神妙さ。思はくよする人もあまた有中に、寺方の和尚談義僧、後家さへいやな舌なめずり、(中略)お糸ハ一向そしらぬ顔に物いはず。(中略)お糸も尖り声にて、ほんにおかしい衆じや、ぬしのある身を取らへて、なめ過たものいひ、気違ひか門たがへかと、ミスミス成るいひかたに、(二の三、242-245頁)

18) 一方、二の二でも妾であるおすみが登場するが、ここでは直接おすみの言動や性格が問題になるのではなく、妾を抱える相手三郎七の賢さに話の焦点が置かれ、これは検討の対象としない。

お糸は素人女性でありながらも、「お金」のために後家であるふりをして和尚達を騙るのである。しかし、お糸は騙りがばれると以前の姿とは売って替って和尚達に冷たくするのであるが、彼女の騙りも妾のそれと同様、「お金」欲しさに行われるのであると言える。次に四の二の浪人の娘のお橋の場合を見てみよう。

河内の枚方（ひらかた）、天の河の辺りに、平戸楫右衛門とて、有徳なる浪人あり。  
 （中略）女房のお琴、ある夜の夢に、鶺鴒の橋の上で、かけ盤で茶漬を喰と見て、お腹のかさ高くなり、終に女の子を産落せしより、父楫右衛門此子の名をお橋とつけて、撫つきすりつつくしみ、千箱の玉と育てしが、器量発明只ならぬ生れ立ちなれば、父母の嬉しきかぎりなく、此草中であらふとも、生先（おいさき）をこそ頼みなれ。紡績（うみつむぎ）ハおしへたとて、とても賤しきわざくれぞ。手書、物よみ、琴のくみ、十五や六のはや覚へに、おしゆる親がはだしにて、逢人ごとに、自慢の鼻は屋の棟よりも高かりし。近郷のとり沙汰、天の河の楫右衛門殿に、天人を産れたげな、いや観音の化身じやと、見に来る人も多かりけり。（四の二、296・297頁）

引用文からも分かるように、お橋は『娘容気』の分限者の娘と同様大事に育てられている。続けて彼女の具体的な姿を見てみる。

もとが世間みずを、あまやかしたる育がらに、かな草子の端々を聞はつりたるいき過者。  
 男えらミハ親一倍にて、著類、手道具、人遣ひも。法慮なき栄耀沙汰。（中略）育て親があやまりにて、異見いさめも聞ばこそ、母のなげき楫右衛門が後悔。（中略）お橋はいかな弱くなく、器量自慢の鼻のさき、かく成りました事なれば、私が身を妾奉公になりと参りまして、お母様に不自由ハさせませぬ。（中略）お橋が勿体。うちかけさばきしとやかに、青木が方へハ目もやらず、お内儀大義とふうわりと座につけば、思はずしらず青木大尽、はつと頭をさげたるもおかしかりき。（中略）あれハえしからぬ気ちがひ、人の栄耀も程ある物、うかうかとは世話がならぬ。（中略）あら勿体なの妾やと。身ふるひしてさらばさらば。（四の二、297-300頁）

上記からお橋は「もとが世間みず」だったのに、その上大事に育てられ、妾奉公に出ても奉公相手を蔑むとんでもない人物であることが分かる。この点から、お橋たる人物は「分限者の娘」であるため成人しきっていない、つまり、社会・身分上の背景を越えられない「気質」を有して言えると見受けられるのである。この旨、四の二の章題「夫を尻に敷金、かなゆづり持て来りつらん」が『娘容気』の一の一の章題「男を尻に敷金の威光娘」と非常に似通っている事実からも納得できよう。次に四の三に登場する姉妹を見てみよう。

姉のお瓶ハ、稚きよりおとなくろしく、神仏を信じ、（中略）父親の看経について、観音経よみならふより、万にさうぎうしからず。妹のこはたは弁口ものにて、毎日の行戻りに、中正嶋の色屋の店に足をとめて、三味線の心がけ、（四の三、306頁）

上で確認できるように、姉お瓶と妹こはたの性格は生れ持つての性格、つまり「個性」だと言える。彼女達の「個性」は己れの属する社会・身分上の背景とは直接関係あるとは言いがたい。したがって、『妾形気』の素人女性のうち、己れの属した社会・身分上の背景を越え「個性」を有する人物も観察できると言えるのである。

以上、『妾形気』の素人女性を見てきたが、彼女達は妾と同様「お金」に執着し、己れの属した社会・身分上の背景を越えられない人物もいれば、『娘容気』のように「気質」と「個性」有する各々の場合が見受けられた。

### 3.3.女性と欲

『妾形気』には遊女も登場する。まず、三の二・三に登場する藤野の姿を見てよう。

お前さへ御得心ならば、私が身をバもとの流れに沈め、今までの親方さんに何もかも打明て、からるだけハかりまして成るも、お身のくろまる御恩報じが致しましと、実のまことに涙をそへていひ出れば、（中略）もとの親方へ二度のつとめ。（三の二、265頁）

よむうちより藤野が悲しみいふばかりなくて、両眼よりなみだわき出るがごとく、只いふ詞もさだかならで、物ぐるハしく見へにける。（中略）仏間に入て看経の声いと殊勝なり。藤野ハそこに夢うつともなく、其日の暮るまで泣き倒れしが、（三の二、278頁）

春秋の紋目おくりむかへて、定めし年も首尾よくつとめて、八畳敷の宿這入り。木綿布子に前だれ引しめ、くだのたすきりしげに、身のすぎわいは此里の女髪結。一生やもめで身をかため、才太郎が追善をねんごろにとぶらひしハ、毛唐人の書し列女伝にも、此かく成るはあるまじ。（三の二、280頁）

遊女藤野は引用文で再三確認されるごとく愛する男のために再度遊女になりその勤めを果す、女性として義理を守り通す人物である。このような彼女の性格は己れの社会・身分上の背景を克服した「個性」だと言え、<sup>19)</sup>『娘容気』の周りを困らせる「個性」とはほど遠く、称賛の対象となるのである。

19) 佐伯順子『遊女の文化史』（中公新書、1987）193頁では以下の言及がある。「『色』に投ぜられる大量の金銀は、女たちの与える『性』に対して、男たちが『有責の念を払い除ける』呪術的起源の金銭を返していることで、（中略）同時に遊女達は金銭で買われることによってその性を万人に開く。」

次に狐だと思われた女性で後に芸子であることが発覚する女性を見てみよう。

其美しさほらしさ、こきん欄に抱帯、かいしょげに引結て、静にあゆミ来るに、(中略) 此野辺に百とせをかさねて住まする狐でござりますが、去秋の末産ました子狐、此ごろ人に取られました。(中略) 若代なり、手代共が多い事、家の主がそれでハ身体も心もとなく、さまざま異見すれど、唐の倭の引言に、口がしこくいひぬけて取あへず。さらば其妾を内へいれうにも、一家世間の思はく、茶屋者ハ嫁に成りがたし。(四の一、286-288頁)

上の女性はある男に囲ってもらっていた芸子であるが、結婚を反対している男の母を騙すため、狐として現れるのである。このように、女性は己れの属する芸子という身分を越え妻になりたく、この彼女の欲は狐として変化したのである。ここからも非現実的ではあるが女性の強烈な「個性」は認められるであろう。

最後に前章で言及した一・二・三に登場するお春たる人物を見てみるが、彼女は浦嶋太郎の血筋だという非現実的な人物である。

婚礼してから十年余り、小さいかひ一ツせず、殊に同い年女夫の火吹ちからさへなく成りて、腎虚火動といふものに病臥、三十五才の年はやくも世を去りければ、女房お春が悲しミ。(中略) 今度の賀ハ由良の舟乗伝三郎とて、荒けづりなる骨組が思ハしと、若死にこりた物好の恋男。入智といふ日和をよく勘(かんが)へて、女房に真切てあしらふ楳取の名人にハ、海ならば海、山ならば山と、人のうらやむ女夫中のむつまじさ。(一の二、202頁)

引用文の傍線部に現れるように、お春は亡き夫、二番目の夫と房事にいそむ女性として暗示されている。そして、お春は終に老ける事なくいつまでも性欲に満ちた女性として描かれているのである。

其身七旬にかたぶきても、浅づけ程の皺もよらず、若き昔にかはらで油ぎりたる俵ハ、お春が身の上によそならず。三人の夫を喰殺しても、ミめかたちハもとより心の若若しさ、一ツとして古びのこぬハ、我ながらもめんような玉手箱の奇特と、神酒を備へ灯明をてらして、弥勒の代までもかたち替らで、よい男百人も持しかへさせ給へと、朝夕いのるかひ有て、(一の三、210頁)

以上のように、お春は「女」という生身の人間ではなく、性欲という「個性」のために社会・身分上の背景を克服してしまう人物として設定されている。

ここまで『妾形気』の女性像を追ってきたが、その具体的な特徴は以下のように整理できる。一つ、『妾形気』の主人公のうち妾は「お金」のために働き、人を騙るのである。しかし、これら妾達の姿は『娘容気』で描かれるのと同様、「女」という社会・身分上の背景を越えることができなかった類型の一つとして描かれているのであり、その具体的姿が「お金に執着する気質」として類型的に表れたと考えられる。二つ、『妾形気』の素人女性も妾と同様「お金」のために人を騙る場合もあるが、場合によっては『娘容気』の女性のように「気質」や「個性」を有する場合も見受けられた。したがって、『妾形気』の素人女性からは社会・身分上の背景に左右されたり、しなかったりする女性の多様さが認められると共に、『娘容気』では見受けられることの出来なかった素人女性の経済的危機を垣間見る事ができる。三つ、『妾形気』には遊女や非現実的な女性も出てくるが、彼女たちは皆己れの社会・身分上の背景を越え、おおざっぱに言う各々義理、愛欲のために「個性」を発揮すると言える。そして、これらの「個性」は『娘容気』のそれが単に周りの人を困らせるものであったのに比して、己れの欲を満足させるために非現実的とも言えるほど強烈な形として表れたと言えるのである。

こうして『妾形気』の女性像を追ってみると経済的危機に瀕した女性とその欲を満たす女性が目につき、これが作品の主題と関連すると考えられる。以上、『妾形気』の女性像は『娘容気』の女性像と似通う部分もあるが、相違点も目に付くのである。その具体的な意義を次で考察したい。

## 4. 最後に

本稿で行った『娘容気』と『妾形気』の女性像の具体的な検討の結果を通して、両作品の女性像の比較考察を行いたい。

前者の女性像を通して江戸中期には経済的安定の下、女性の属する社会・身分上の背景と密接な類型的「気質」が見受けられると共に、各々の現に属した社会・身分上の背景を越えた「個性」を露にしようとした女性も観察されたと言える。したがって、『娘容気』では社会・身分上の背景に捕われ翻弄されつつもそれを越えてみようとした江戸中期の女性の一側面を垣間見ることが出来ると言える。

一方、『娘容気』の女性達が比較的経済的に恵まれ、その社会・身分上の背景も多様であったのに比して、『妾形気』に登場する女性達は大きく妾、素人女性、遊女に分けられ、多くの場合経済的に恵まれていなかった。この差異からでもあろうが、『妾形気』の妾及び素人女性の一部は「お金」のために他人を騙り、絶対的な価値観を持たないという類型的な「気質」を有する。もちろん『妾形気』にも『娘容気』の女性達のよ

うに己れの属した社会・身分上の背景に順応する人物も登場するが、一方で義理・愛欲のために己れの属した社会・身分上の背景に順応できず、非現実的だと見受けられる「個性」までも見せ付ける人物も登場する。ここに『娘容気』と『妾形気』の女性像の差異が現れるのである。

言い換えると、『娘容気』の女性の「気質」は経済的安定や以前人物が属していた上位の社会・身分上の背景のため生れる類型的なものであって、これは多くの場合、社会から許されるものであった。しかし、『妾形気』の「気質」は経済的不安定による「お金」と関わるものであり、これは一步間違えると犯罪の範疇になりかねない。つまり、『娘容気』の中で描かれる「気質」より『妾形気』の「気質」は一層切羽詰まった江戸の女性像を写し出しているのである。また、『娘容気』の女性の「個性」は六の一に登場する武士の娘で愛欲のために逃げ回るおとわを除いては、多くの場合生れ持った性格だと言える。一方、『妾形気』の「個性」は四の三の場合のように生れ持った性格の場合もあると言えるが、義理・愛欲のために己れの社会・身分上の背景を越えて見ようとする「個性」であり、これは非現実的に写るほど強力なものであった。したがって、『娘容気』より『妾形気』の女性が有する「個性」は非現実的に写るが、しかし、ここまで切実な女性たちの「欲」が『妾形気』には表れているとも言える。

以上『娘容気』と『妾形気』の女性象の比較により、後者に登場する女性の方が現実の切迫した経済状況や生々しい人間の「欲」を露にしていると考えられる。このことは其磧と秋成個々の経済的境遇の差異、または彼らが生きた時代的差異を示しているのかも知れないが、むしろ気質物が描いた女性像の移り変わりだと捉えるほうが妥当であろう。50年の隔たりが気質物の女性像に影響を及ぼしたものの、それはより生々しく緊張感のある人間の「経済的生活」と「欲」への関心にほかならない。



## 【参考文献】

- ・石山美穂（1993.3.）「上田秋成の浮世草子-『世間妾形気』巻之三第七をめぐって-」  
〈白門国文〉、第10号、中央大学国文学会
- ・伊藤竜平（1999.3.）「上田秋成の比喩-散文作品を中心に-」〈国学院大学大学院紀要  
-文学研究科-〉、第30輯、国学院大学大学院
- ・佐伯順子『遊女の文化史』（中公新書、1987）
- ・佐伯孝弘（2004）『江島其磧と気質物』、若草書房、282頁
- ・佐伯孝弘（1993）「お春の造形-『世間妾形気』の一の二・一の三小考-」『近世文学  
論輯』（森川昭編）、和泉書院
- ・中嶋隆訳注（1990）「世間娘容気」、『世間子息気質 世間娘容気』、社会思想  
社
- ・長島弘明（2000）『秋成研究』、東京大学出版会、75-90頁、91頁
- ・森山重雄（1958.6.）「秋成の浮世草子-気質物から諸道聴耳世間猿と世間妾形気-」  
〈国文学解釈と鑑賞〉、23巻6号、至文堂
- ・\_\_\_\_\_（1997）『上田秋成初期浮世草子評釈』、国書刊行会
- ・森田喜郎（1977.6.）「気質物としての『諸道聴耳世間猿』『世間妾形気』の意義につい  
て」〈文学研究〉、第45号、日本文学研究会
- ・\_\_\_\_\_（1992.6.）「上田秋成の描いた女性」〈文学研究〉、第75号、日本文学研  
究会

## 要 旨

本論は、数少ない江戸期の気質物の中でも主として「女性」の言説・行動に焦点を当てた作品である『娘容気』、『妾形気』両作に注目し、その女性像の比較により浮世草子に描かれた江戸の女性像の一端を把握するところに目標を置く。

具体的な検討の結果、『娘容気』の主人公である女性像を通して『娘容気』が執筆された時代には女性の社会・身分と密接な類型的「気質」が見受けられると共に、社会・身分を越えた「個性」を有する女性も観察された事が分かった。そして、身分の高い女性が町人として生きていく、いわば位落ちの生々しさも見受けられた。これらを総合して見ると、『娘容気』には江戸中期の女性が社会・身分に捕われ翻弄されつつもそれを越えてみようとした一側面を垣間見たと言える。この点こそが『娘容気』の女性像から窺える主題でと考えられる。

一方、『妾形気』の女性像を追ってみると、経済的危機に瀕した女性と己れの欲を満たす女性が目につき、これが作品の主題と関連すると考えられた。『妾形気』に登場する女性達は大きく妾、素人女性、遊女に分けられ、多くの場合経済的に恵まれていなかった。この差異からでもあろうが、『妾形気』の妾及び素人女性の一部は「お金」のために他人を騙り、絶対的な価値観を持たないという類型的な「気質」を有した。もちろん『妾形気』にも『娘容気』の女性達のように己れの属した社会・身分上の背景に順応する人物も登場するが、一方で義理・愛欲のために己れの属した社会・身分上の背景に順応できず、非現実的だと見受けられる「個性」までも見せ付ける人物も登場した。ここに『娘容気』と『妾形気』の女性像の差異が現れるのである。

『娘容気』と『妾形気』の女性象の比較により、後者に登場する女性の方が現実の切迫した経済状況や生々しい人間の「欲」を露にしていたと考えられた。このことは其磧と秋成個々の経済的境遇の差異、または彼らが生きた時代的差異を示しているのかも知れないが、むしろ気質物が描いた女性像の移り変わりだと捉えられる。50年の隔たりのある両作品に描き出された女性象の変異は一段と生々しく緊張感のある人間の「経済的生活」と「欲」への関心を意味するのである。

キーワード：『娘容気』、『妾形気』、女性像、社会・身分上の背景、「気質」、「個性」、「お金」、「欲」

투 고 : 2007. 5. 31
1차 심사 : 2007. 6. 9
2차 심사 : 2007. 6. 30

住 所 : (136-090) 서울 성북구 종암1동 삼성 래미안 아파트 114-802  
電 話 : 011-9009-9999  
e-mail : youngrankoh@hanmail.net